

Eureka XIII

六年制通信 No.2 令和7年4月11日(金)号

鳥が言葉を？

動物行動学が以前からあることは知っていましたが、動物言語学という学問があることを最近知りました。何でも「私は鳥の話す言葉がわかります」という学者がいて、鳥には言語があると主張されていました。三月の終わりにテレビで観たのですが、アナウンサーもしきりに感心していました。しかし、だいたいこういう話は何年か置きに出てくる定番でして、そもそも言語の定義をはっきりさせていない上に、動物どうして行う何らかの「合図」をすぐに「言語」と表現してしまうのですね。

動物が、その種だけに通じる何らかの合図を持っていることは、例えば蜜蜂の8の字ダンスや蟻が餌のありかを伝える方法など、わりとよく知られていると思います。しかし、これらの伝達手段は言語ではありません。言語の定義は次の三つが満たされていること、とされています。一つ、母音と子音の組み合わせで発声され、文節があること。言語の一義的な側面は「音（おん）」です。文字ではありません。英語のスピーチ、つまり「話し言葉」であることが重要なのです。二つ、音と意味の関係が自由、恣意的であること。これが恐らく人間だけの持つ特別な能力ではないかと思えます。これは例えば「イヌ」を表すのに「inu」という音でなければならないという必然性はないということですが、それ以上に重要なことがあります。状況によって言葉は反対の意味を表すこともできるということです。例えば「大嫌い」という言葉は文字通りの意味だけに使われるわけではないですよ。女の子がにっこりと微笑みながら「あなたなんて、大嫌い」なんて言うと、これ、「大好き」という意味でしょ。違うのかな…。こういう、音と意味の関係性を持っているのは人間の言語だけだと思います。三つ、単語が無限に生産できること。動物の伝達できる語の数と人間の持つ語彙の規模は桁が違います。以上の三つが一応言語の定義とされています。

それでも、動物が人間の言語を理解することがあるではないかと言われるのですが、例えば京都大学のチンパンジーのアイちゃんは図形を覚えていくつかの意思伝達ができるようになりました。チンパンジーは遺伝子が人間と近いので他の動物に比べて知能は高く、アイちゃんでもなくても訓練すればこちらの指し示す合図を理解するようになると思います。しかし、これもアイちゃんが言語を習得したとは言えません。

水族館のイルカにジャンプを教える苦労のあるテレビ番組で観たことがあります。イルカの知能の高さに驚きました。彼らも独自の意思伝達手段を持っています。しかし、言語の三要件は当然ながら満たしていません。番組中面白かったのは、「ジャンプ」という音を水中に流すとジャンプするように調教したイルカに「ジャ…」とか「キャン

プ」など「ジャンプ」と紛らわしい音を聞かせたらどうなるかという実験でした。まず「ジャ…」では勢いよく泳ぎ出し、しかしジャンプはしませんでした。合図が途中で終わったことを理解したようでした。「キャンプ」ではそもそも反応しませんでした。「ジャンプ」とは別物と認識したのでしょうか。イルカは賢いですね。

では、人間に近いとされるネアンデルタール人は言語を持っていたのでしょうか。これ、恐らく持っていなかったと推測されています。彼らの骨の構造から五種類ほどの鼻母音を発声できただろうと言われていています。「ンガッ」「ンゴッ」みたいな音ですね。しかし、この発声だけでは言語の三要件を満たすのは無理です。

言語は私たち人間だけに与えられた能力なのです。これを「量子的飛躍」という人がいます。森羅万象には因果関係があり物事は連続して起こるものですが、突然全くあり得ない起こり方をする、連続せずぴょんと飛び越えるような起こり方をする、それを量子的飛躍と言う、と。例えば、誕生したばかりの頃は地球は火の玉だったはずで、もちろん生命の在ろうはずもなかった。連続性があるなら今でもこの星に生命は存在しないはずなのに、生命が誕生しました。これが一つ目の「飛躍」です。そして二つ目の「飛躍」が人間が言語を持ったということです。言語を持ったがゆえにそこに魂が宿った、そう考える人もいます。皆さん、どう思いますか。

今週のおすすめ

・浅田次郎 『^{ほっほや}鉄道員』 (集英社文庫)

昔、阿刀田高が『ナポレオン狂』というタイトルの短編集で直木賞を受賞した時、賞は短篇集全体に対しての評価、つまり「ナポレオン狂」という短篇に与えられたのではなく一冊の本に与えられたのだとなかなか世間がわかってくれないと言っていました。浅田さんの『鉄道員』も八つの短編集で直木賞を受賞しています。中の「鉄道員」は40ページほどの短編です。高倉健の主演で映画にもなっています。先日観る機会があったのでまた読みたくなって読み返してみました。映画では北海道の圧倒的な雪の風景が描かれていて、高倉健演じる乙松の一途さとよくマッチしていると思いました。とにかく原作がいいですね。浅田さんは婦女子の紅涙を絞るような作品を書かせたら天下一品ですな。ま、何も婦女子に限りませんけど。私も泣きそうでしたから。改めて読み返してみて「鉄道員」以外の短編もどれも秀逸で驚きました。前に読んでいたので、再読しているうちにストーリーを思い出したものもありましたが、完全に忘れていた作品もありました。年齢が進むと物事の捉え方が変わってくるものですが、「ラブ・レター」など、若い時ならひよっとしたら何とも思わなかったかもしれません。いや、それ以上にここに出てくる女も男も私にとっては許せない部類の人間に映ったに違いないと思います。しかし、今読んで、私は自分でも驚くほどの深い悲しみに包まれました。こういう物語もあるのだと思いました。まるで遠藤周作の『わたしが・棄てた・女』の読後感のような哀しみでした。

BGMは Michael Jackson の *Heal the World* でした…。